

平成二十五年 度総会…………… 松山子規会事務局 …… 一

草田男に学ぶ…………… 宮本憲司 …… 五

森連甫の句「真砂の志良邊」より…………… 森 慎吾 …… 一五

平成二四年度子規ほか研究資料・文献目録…………… 松山市立子規記念博物館 …… 四〇

# 子規會誌

一三八号

平成二十五年  
七月

# 例会記録

## ○平成二五年四月例会

講演 「折井愚哉と安藤正楽」

会員 山上茂次郎

折井愚哉に関する研究は、これまで比較的少なく、子規会例会においても最初の講演である。折井愚哉が土居町を訪れたこと、また渡米する愚哉を正楽が見送ったことなどを含め、子規と正楽の交流の事実や「相模百景」の精査による子規句の抽出など縦横に考察を加え、的確に纏められた。「日本」及び「ホトトギス」に出てくる正楽の句をも指摘され、充実したレジュメそのものが貴重な資料となった。周到な準備により、一貫して謙虚な姿勢で、時間配分にも配慮しつつ、発表された。

## ○平成二五年五月例会

講演 「明治二十五年八月の MATSUYAMA

子規・漱石・ホーキンス」

常任理事 三好 恭治

確かな原典を広く探究し、明治二十五年八月の子規・漱石・ホーキンスの動静の丹念な調査研究とその関連の一覧の作成、また愛媛県尋常中学校の四人の外国人教師に関して独自の綿密な資料を作成、特にホーキンスに付いてはその著作「Twenty Months in Japan」を読み解き、英文を駆使して綿密に経歴をまとめられた。外国人の目で見た松山城、石手川、道後の秋祭り等は興味深い内容である。更に愛松亭の内部や付近の状況が平面図で紹介されたのは貴重な資料となった。

## ○平成二五年六月例会

講演 「蕪村句集を巡って」 鳴雪と霽月

会員 中野 匡子

村上霽月の親族・曾孫の立場から、先ず霽月旧居の状況を紹介、遺された多くの霽月宛て書簡を読み解きながら、霽月や鳴雪の著書、新聞記事を引用して蕪村句集の入手の経緯及び句集のその後についても触れられた。蕪村句集の発見は伊予の国においてであり、霽月や鳴雪がいなければ、発見はあり得なかったことを、資料により具体的に検証した。発見の契機として「権の友」の活動、その後の仙波花叟の関わりを指摘、今後の研究の一層の進展も期待される内容であった。

# 例会案内

## ○八月例会 平成二五年八月一九日(月) 正宗寺本堂

講演「明治三十五年前半期の子規及び子規周辺」

碧梧桐・虚子の露月宛書簡より

子規記念博物館 竹田美喜館長

## ○九月例会 平成二五年九月一九日(木) 正宗寺本堂

一・二回 子規忌法要

講演「子規と南土居大倉家」

副会長 和田克司

## ○一〇月例会 平成二五年一〇月一九日(土) 正宗寺本堂

講演「子規の俳論をめぐって」 常任理事 平岡 英

## ○南予支部十九周年記念 俳句と講演の会

平成二五年一〇月二〇日(日) 午後一時

西予市宇和町卯之町三丁目 宇和文化の里 中町集会所

# 平成二十五年年度松山子規会総会

## 松山子規会事務局

平成二十五年四月十九日（金）午後一時三十分より、松山市立子規記念博物館の視聴覚室において、四十八名が出席して平成二十五年年度松山子規会総会が開催された。総会に先立って、午前十時より理事会が開催され、総会に提出すべき議案を審議、すべて原案どおり承認された。

### 総会次第

- 一 会長挨拶 会長 井手康夫
- 二 編集委員長挨拶 編集委員長 和田克司
- 三 平成二十四年度事業報告 事務局 畷川武彦
- 四 平成二十四年度収支決算（監査）報告 会計 森 慎吾
- 五 平成二十五年事業計画 事務局 畷川武彦
- 六 平成二十五年会計予算 会計 森 慎吾
- 七 その他

### 会長挨拶（要旨）

「平成二十四年度に計画した諸事業が完了した。会員の皆様のご協力に感謝したい。会員数は二十四度も減少傾向にあったが、各月の例会においては満席になることが多い。興味をもつて参加される方には入会を勧めたい。「子規事典」も胸突き八丁の状況だが、曙光が差し込んできている。刊行、販売の組織を立ち上げたい。四年先の子規生誕百五十周年についても考えていきたいので、皆さんのご意見を拝聴したい。」

### 編集委員長挨拶（要旨）

「子規事典は、子規生誕百五十年記念としての刊行を目標としている。内容構成については、各事典項目を中心に、子規の漢詩、俳句、短歌などの評釈も重視する。松山関係の主要な画像は故風戸始氏撮影資料を活用したい。しかし、事典に掲載する子規関係人物の画像は今後とも集成に協力をお願いする。事典巻末の総合索引では、有機的な繋がりを構成し、配列に工夫を凝らして、有意義な事典となるように努力する。なお、各項目の内容関連の校正用に文献の集協力をお願いしたい。」

### 議事

恒例により、会長が議長となつて議案の審議が行われた。平成二十四年度の事業報告、決算報告が承認され、二十五年の事業計画、予算案についても審議の結果、原案どおり可決された。

### 「その他」として

- ・ 会員増のために、それぞれの立場で努力すべきである。
- ・ 「子規会誌」の販路の拡大について検討すべきである。
- ・ 平成二十七年開催の愛媛国体と子規生誕百五十年のコラボを図つてはどうか。等の意見が出された。

### 記念講演

- ・ 演題 「子規と折井愚哉と安藤正栄」
- ・ 講師 松山子規会会員 山上茂次郎

## 平成24年度 決 算 書 (1)

自 平成24年 4月 1日

至 平成25年 3月31日

### 収入の部

(単位 = 円)

費 目	予算額	決算額	差引増減
繰越金	158,300	158,300	0
会費	500,000	435,000	△ 65,000
普通会費	50,000	435,000	△ 65,000
賛助会費	0	0	0
寄付金	50,000	90,000	40,000
補助金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑収入	91,700	167,764	76,064
会誌・書籍売上金	50,000	118,870	68,870
広告料	40,000	40,000	0
その他雑収入	1,700	8,894	7,194
計	1,000,000	1,051,064	51,064

## 平成24年度 決 算 書 (2)

### 支出の部

(単位 = 円)

費 目	予算額	決算額	差引増減
報償費	175,000	150,000	25,000
謝礼金	130,000	115,000	15,000
寄稿謝礼金	10,000	0	10,000
編集費	35,000	35,000	0
需要費	820,000	766,891	53,109
印刷費	600,000	570,672	29,328
通信費	60,000	35,650	24,350
会場費	20,000	17,300	2,700
会議費	60,000	89,923	△ 29,923
事務費	30,000	19,545	10,455
備品費	5,000	0	5,000
慶弔費	10,000	0	10,000
雑費	30,000	33,801	△ 3,801
行事補助費	5,000	0	5,000
予備費	5,000	0	5,000
次期繰越金		134,173	△ 134,173
計	1,000,000	1,051,064	△ 51,064

収入・支出の差額 134,173円は次期繰越金とする。

(監査報告) 上記のとおり諸帳簿は正確に処理されておりました。

平成25年 4月 5日

監 査 福 井 みどり  
宇都宮 弘 之

平成25年度 予 算 書 (1)

自 平成25年 4月 1日  
至 平成26年 3月31日

収入の部

(単位=円)

費 目	本 年	前 年	差 引
繰 越 金	134,173	158,300	△ 24,127
会 費	500,000	500,000	0
普通会費	500,000	50,000	0
賛助会費	0	0	0
寄 付 金	40,000	50,000	△ 10,000
補 助 金	200,000	200,000	0
市補助金	200,000	200,000	0
雑 収 入	125,827	91,700	34,127
会誌・書籍売上金	80,000	50,000	30,000
広告料	40,000	40,000	0
その他雑収入	5,827	1,700	4,127
計	1,000,000	1,000,000	0

平成25年度 予 算 書 (2)

支出の部

(単位=円)

費 目	本 年	前 年	差 引
報 償 費	175,000	175,000	0
謝礼金	130,000	130,000	0
寄稿謝礼金	10,000	10,000	0
編集費	35,000	35,000	0
需 要 費	820,000	820,000	0
印刷費	600,000	600,000	0
通信費	50,000	60,000	△ 10,000
会場費	20,000	20,000	0
会議費	80,000	60,000	20,000
事務費	30,000	30,000	0
備品費	5,000	5,000	0
慶弔費	10,000	10,000	0
雑 費	20,000	30,000	△ 10,000
行事補助費	5,000	5,000	0
予 備 費	5,000	5,000	0
計	1,000,000	1,000,000	0

## 平成24年度松山子規会事業報告書

年月	行 事 内 容	年月	行 事 内 容
24年 4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎9日 第10回花見会 石手川公園</li> <li>◎19日 平成24年度松山子規会理事会、総会並びに第831回例会 講師 三好恭治 「漱石の月俸八拾円の「真実」」</li> <li>◎19日 子規会誌 (133号) 発行</li> <li>◎19日 子規事典 第1回新編集委員会</li> </ul>	10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第837回例会 講師 平岡英「虚子と松山」</li> <li>◎19日 子規事典第6回執筆集成部会</li> <li>◎19日 子規会誌 (135号) 発行</li> <li>◎23日 南予支部18周年記念俳句と講演の会 講師 宇都宮弘之「樋口一葉母子と子規・漱石・蘭外」</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎18日 子規事典第1回執筆集成部会</li> <li>19日 第832回例会 講師 戒能中脩「松山今昔・下」</li> <li>◎19日 子規事典第1回映像集成部会</li> </ul>	11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第838回例会 講師 近藤元規「松風会会員 我観の周辺」</li> <li>◎19日 子規事典第2回映像集成部会</li> </ul>
6月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第833回例会 講師 今村威「子規の連句復活」</li> <li>◎19日 子規事典第2回執筆集成部会</li> </ul>	12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第839回例会 講師 高谷照雄「鶏頭を舞台に 俳人・柳瀬夢科と阿部里雪」</li> <li>◎19日 子規事典第2回全体編集委員会 終了後懇親会</li> </ul>
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第834回例会 講師 二神将「家族の絆と極堂～三度の挫折を超えて～」</li> <li>◎19日 子規事典第3回執筆集成部会</li> <li>◎19日 子規会誌 (134号) 発行</li> </ul>	25年 1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 平成25年新年懇親会並びに第840回例会 石手公民館 会長年頭挨拶 子規漢詩朗詠 居合演 武カラオケ ビンゴ 百人一首</li> <li>◎19日 子規会誌 (136号) 発行</li> </ul>
8月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第835回例会 講師 渡部平人「子規と古白～明治24年を中心に～」</li> <li>◎19日 子規事典第4回執筆集成部会</li> </ul>	2月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第841回例会 講師 宮本薫司「草田男に学ぶ」</li> <li>◎19日 子規事典第3回映像集成部会</li> </ul>
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第111回子規忌 第836回例会 記念講演 副会長 和田克司「子規の松風会 選句稿」</li> <li>◎19日 子規事典第5回執筆集成部会</li> <li>◎30日 子規会月見会 石手公民館</li> </ul>	3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第842回例会 講師 森慎吾「森連甫の句～『真砂の志良邁』より～」</li> <li>◎19日 子規事典第7回執筆集成部会</li> <li>◎30日 第11回花見会 石手川公園</li> </ul>

## 平成25年度松山子規会事業計画書

年月	行 事 内 容	年月	行 事 内 容
25年 4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 平成25年度松山子規会理事会、総会並びに第843回例会 (子規博) 講師 山上茂次郎</li> <li>◎19日 子規会誌 (137号) 発行</li> </ul>	10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第849回例会 (正宗寺) 講師 平岡英</li> <li>◎19日 子規会誌 (139号) 発行</li> <li>◎未定 南予支部総会 (宇和町中町集会所)</li> </ul>
5月	◎19日 第844回例会 (正宗寺) 講師 三好恭治	11月	◎19日 第850回例会 (正宗寺) 講師 忽那哲
6月	◎19日 第845回例会 (正宗寺) 講師 中野匡子	12月	◎19日 第851回例会 (正宗寺) 講師 佐伯健
7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第846回例会 (正宗寺) 講師 泉寔</li> <li>◎19日 子規会誌 (138号) 発行</li> </ul>	26年 1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 平成26年新年懇親会並びに第852回例会 (石手公民館)</li> <li>◎19日 子規会誌 (140号) 発行</li> </ul>
8月	◎19日 第847回例会 (正宗寺) 講師 竹田美喜	2月	◎19日 第853回例会 (正宗寺) 講師 今村威
9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎19日 第112回子規忌法要 (正宗寺)</li> <li>◎19日 第848回例会 (正宗寺) 講師 和田克司</li> <li>◎未定 子規会月見会 (石手公民館)</li> </ul>	3月	◎19日 第854回例会 (正宗寺) 講師 高橋俊夫

# 草田男に学ぶ

宮本憲司

## 1、はじめに

### (1) 六十年前の想い出

「ほかなりがなかねるばりうじうくき」

これは、正岡子規の有名な俳句「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」を、バラバラにしたもので、文字の順番は違っていると思うが、作者と俳句を当てる昭和二十七、八年頃のNHKラジオのクイズ番組だったと思う。これを聞いていた父が、しばらく考えて「わかった、正岡子規の（柿食えば…）」と言ったことを、六十年程経った今でも覚えている。私が、「俳句」と「正岡子規」という言葉を耳にしたのは、これが最初であった。

### (2) 芝不器男記念館

十数年前、松野町にある中世の城跡「河後森城址」を訪ねて行ったことがある。城山を、下りたところに芝不器男の生家を記念館にしたところがあつて入った。二十六歳の若さで亡くなったということ、南予の一寒村からこれほど著名な俳人が出ていたのかと驚いたことが印象に残っている。

る。

中村草田男は、芝不器男の俳句について「その作品は、ことごとく明るさのみなざり渡った平和な雰囲気と無垢なつましい叙情味とによつて成り立っている」と語っている。

### (3) 現代の芭蕉 中村草田男

戦前は「旗艦」、「天の川」、「雲母」に属し、戦後は、無所属で評論・随筆の筆をふるった岩田潔が「現代の芭蕉：姓は中村 名は草田男」と礼讃したという中村草田男という人とはどんな人だったのだろうか。

本人は「東京大学を裏表やりました」と言つて、三十二歳で卒業し、卒業論文は「子規の俳句観」。昭和二十六年五十歳の時、東京都主催の「子規五十回忌」に招かれ、「子規と現代俳句」について講演、同年松山市主催の子規五十年記念祭の講演もある。昭和四十七年十一月紫綬褒章、昭和四十九年四月勲三等瑞宝章を受章し、没後昭和五十九年六月日本芸術院賞・恩賜賞を受けた。などの記録が見える。

今回は、正岡子規以降の主な俳人・結社・俳誌の動向と  
その中で草田男が、どんな働きをしたかまたどんな人柄で  
あったかと言うことを中心にまとめた。

## 2、正岡子規以降の主な俳人・結社・俳誌の動向

子規の周りには、内藤鳴雪、河東碧梧桐、高浜虚子、石  
井露月、藤野古白、五百木瓢亭、河東可全、夏目漱石など  
子規派（日本派、根岸派、ホトトギス派とも呼ばれる）と  
呼ばれる俳人が多く出るが、なかでも、虚子、碧梧桐は、  
子規門の双壁と言われている。子規没後、虚子は雑誌「ホ  
トトギス」を、碧梧桐は日本新聞「俳句欄選者」をそれぞれ  
継承した。

### (1) 虚子とホトトギス

虚子が継承した「ホトトギス」は、明治三十年一月柳原  
極堂がひらがなの「ほととぎす」として創刊し、二十号ま  
で松山で出版されたが、地方の発売であったためか、販売  
部数はあまり伸びなかった。翌、明治三十一年十月二巻一  
号として東京で発行され、以降子規のリードのもと、虚子  
と二人で運営、明治三十四年十月カタカナの「ホトトギス」  
に改名し、子規没後虚子が継承した。虚子は、碧梧桐を中  
心とする新傾向俳句に対し、伝統俳句を守るという立場か  
ら、大正二年「ホトトギス」において、守旧派宣言、昭和  
三年大阪毎日新聞講演会で、初めて「花鳥諷詠」を講演す

るなど、子規後継者として俳壇をリードしていった。

草田男は昭和四十六年二月「萬緑（講演）」の中で虚子の  
ことを次のように述べている。

『先生は一言で言えば「本末を乱さなかった人」である。先  
生は純粹な日本人らしい性情を充分、そして片寄りなしに  
持つておられた。その性情によって、子規から引き継いだ日  
本固有の文学の基礎というものを、揺ぎなく何十年も、ひ  
たすら実践によって守り、今日の俳壇の大きな基盤（我々  
が安心してその上に身を委ねている基盤）というものを形  
成された。』

### (2) 「ホトトギス」の主な俳人の動向

#### ① 京大三高俳句会系 日野草城

草城は、昭和九年連作「ミヤコ・ホテル」を「俳句研究」  
に発表、論議を呼ぶ。昭和十一年ホトトギス同人を除名さ  
れたが、これは、この「ミヤコ・ホテル」の発表が原因と  
言われている。なお、昭和三十年にはホトトギス同人に復  
帰している。

このとき一緒に除名されたのは、九大俳句会系吉岡禪寺  
洞、女性では杉田久女がいる。

昭和十年「旗艦」創刊主宰、昭和二十四年「青玄」創刊  
主宰する。

#### ② 東大俳句会系 水原秋桜子と山口誓子

虚子（「ホトトギス」と「写生観」の考え方の違いから、

秋桜子が昭和六年ホトトギスを離脱、昭和九年ホトトギスの傘下で主導していた俳誌「馬酔木」を主宰、誓子も昭和十年ホトトギスを離れ馬酔木へ参加した。誓子は、京大三高俳句会出身であるが、三高から東大に進学、東大俳句会で虚子の指導を受けた。

### ③ 中村草田男

同じく東大俳句会系の中村草田男も昭和十六年戦時下の混乱期にホトトギスを離れている。昭和二十一年「萬緑」創刊主宰する。

### (3) 河東碧梧桐

子規から日本新聞俳句欄の選者を継承した碧梧桐ではあったが、あくまで「子規選」であつて、子規没後投句者は激減した。また、碧梧桐派の俳句は「新傾向」と呼ばれ、虚子の伝統的俳句（守旧派）と対立することとなつた。碧梧桐は明治三十九年から明治四十四年にかけて、二次に及ぶ全国行脚を行い地方俳人との交流を通じて、碧梧桐派の勢力拡大につなげた。

明治四十四年門下の荻原井泉水が、碧梧桐を中心とした新傾向俳句の機関誌として「層雲」を創刊し大須賀乙字も参加した。乙字は、碧梧桐の「無中心論」に反対し離脱、碧梧桐も井泉水の「季題無用論」と対立し離脱した。なお、「層雲」には、碧梧桐の離脱と前後して、種田山頭火、尾崎放哉が参加、活躍することになる。次いで、碧梧桐は、大

須賀乙字、塩谷鵜平、中塚一碧楼と大正四年俳誌「海紅」を立ち上げ、自由律俳句へと進むが、これも大正十二年離脱、その年、個人誌「碧」を創刊、大正十四年終刊後「三味」を創刊した。

このように、碧梧桐は、定型から暗示法・無中心論の新傾向、自由律、ルビ付俳句へと、俳句の可能性を極めるため、句風を革新し、全力を傾けて邁進したが、昭和八年満六十歳を機に俳壇を引退した。

### (4) 「馬酔木」

大正十一年「破魔弓」として創刊。復興した東大俳句会の機関誌的役割を果たした。昭和三年「馬酔木」と改題し、秋桜子主導の「ホトトギス」の傘下誌となる。

昭和六年秋桜子が虚子と「写生観」の違いから「ホトトギス」を離脱し、馬酔木もホトトギスから独立、昭和十年誓子、橋本多佳子もホトトギスを離脱、馬酔木に参加し、馬酔木は反ホトトギス、反伝統俳句の新興俳句運動へ進む。

新興俳句の特徴は、一句では表現できない主題を五句十句と連作することで内容の広がりを用意した表現形式（連作）の多用である。しかし、その中で、秋桜子達が、予期しなかつた、季語のない無季定型派が生まれ秋桜子、誓子、加藤楸邨、石田波郷らが強く反発、篠原鳳作、西東三鬼ら無季定型派と対立が出てくる。

## (5) 「天狼」

昭和二十一年フランス文学者で当時東北大学法学部教授でもあった、桑原武夫が、俳句は芸術ではない。強いて芸術というなら第二芸術である。と言ったことから、反論、反響が巻き起こった。これに危機感を抱いた俳人達が、山口誓子を中心として、「根源俳句」をスローガンに、昭和二十三年同人誌として創刊（後に誓子主宰）したもので多くの俳人が参加し戦後の一大結社となった。

## 3、草田男の働き

### (1) 人間探求派

草田男は、「馬酔木」の加藤楸邨、石田波郷と共に人間探求派と呼ばれた。これは、ホトトギスの草田男、馬酔木の加藤楸邨、石田波郷、石楠の篠原梵、司会 山本健吉で開かれた昭和十四年八月号「俳句研究」の座談会がきっかけでこう呼ばれるようになった。この中で、「人生ないし人間の探求」ということでは、他の三人と考えが一致するものの、草田男だけは、俳句を文芸まで高めるという考え方であり、春夏秋冬の移り変わりによって起こる自然界の現象やそれに伴う人事界の現象を諷詠するという虚子の提唱する純粹な花鳥諷詠と違った方向になっている。草田男が、昭和十六年にホトトギスを離れた理由の一つとも言える。

### (2) ミヤコ・ホテル論争

日野草城がフィクションとして昭和九年四月「俳句研究」に発表した連作「ミヤコ・ホテル」を巡って、発表当時から賛否両論があり、草城擁護派は、室生犀星、西東三鬼、秋元不死男、批判派は、秋桜子、久保田万太郎、草田男らがあった。中でも草田男は、昭和十一年七月「新潮」に「尻尾を振る武士」を発表し、女性蔑視の句作態度を取る草城を厳しく非難し二人の間で激しい応酬があった。

ミヤコ・ホテル 日野草城

(昭和九年四月「俳句研究」発表)

けふよりの妻と来て泊つる宵の春  
夜半の春なほ処女なる妻と居りぬ  
枕辺の春の灯は妻が消しぬ  
おみなとはかかものかも春の闇  
薔薇にほふはじめての夜のしらみつつ  
妻の額に春の曙はやかき  
麗らかな朝の焼麴はづかしく  
湯あがりの素颜したしく春の昼  
永き日や相触れし手はふれしまま  
失ひしものを憶へり花曇

草田男と草城の主な論争（抜粋）

草田男「尻尾を振る武士」（昭和十一年七月「新潮」）

「あるものは、草城という人から発する堪え得ざるほどの悪臭ばかりである。」

「暗い街角で売る、猥本の中以外に、いったい何処でこんな言葉とリズムが思い出せるものであろうか」

草城「瞞れるドン・キホーテ」（昭和十一年八月「新潮」）

「もともとあれは」大した作品ではない。発表後二年以上の今日あちこちで問題にされるのは少し羞しく思う」

「春の闇を悪臭の結晶というが、先入主となった君の反感が、本来この句にない悪臭を君に嗅覚させたのではないか」

草田男「長生アミーバ」（昭和十一年十一月・十二月「俳句研究」）

「人性及び人生に対する尊敬と愛情の喪失、たかをくくった思いあがり、羞恥を知らぬ汚穢なる指先で（中略）かかる作者自身から甚だしい悪臭が立ちのぼってきたのだ」

草城「春遠からじ」（昭和十一年十二月「俳句研究」）

「結婚とか初夜とか、そうしたものを余り神聖視したり、一途に厳肅なものと思いつ込んでしまうことは認識の薄弱を示すことになる惧があるから、この後とも気をつけるがいいと思う」

香西照雄著「中村草田男」によると論点は、

草田男は、女性を好色の対象と考えず、自分と対等の魂

ないし人格と考えている。草城は女性を好色や、享楽の対

象として等の人格とは見ない封建遺制的な考えを持つ。草

城の先輩意識を笠に着た威嚇と、草田男の真摯な興奮と誇

りに対する草城の冷静を装った揶揄とが目立つ。

と言っている。

この論争はすれ違いに終わっているが、なぜ、草田男

が、草城の言うように発表から二年も経って論戦を挑ん

だかという疑問はあるが、東大を卒業して間もない当時

三十六歳の草田男の名を世間に知らしめるには充分であ

ったと思われる。

### (3) 戦争と弾圧(昭和俳句事件)

#### ①特高警察による俳人の検挙

昭和十五年、反戦色の強い結社「京大俳句」十五名、翌十六年には「広場」「土上」「俳句生活」「日本俳句」の十三名が一斉に検挙された。また、これらの結社は新興俳句運動の中心であったことから、昭和六年秋桜子のホトトギス離脱に端を発した新興俳句運動は一応終焉を迎えた。

#### ②小野蕪子の狙いと草田男の反骨

昭和十五年十二月「日本俳句作家協会」が発足、虚子が会長に就くも、実権は常任理事で副会長の小野蕪子が握った。

草田男も、昭和十六年春、伝統無視の作句態度が当局に目をつけられ、虚子から自重を求められ一時自重したが、畏友の川端茅舎の病死を境に「自分はイデオロギー的なものを作っているわけではないのだから」と「青露変」という群作を「俳句研究」に発表した。蕪子はこの中の「汝等老いたり虹に頭上げぬ山羊なるか」のような作品を、俳句作家協会の長老達への反抗、嘲笑と解し、またその他の言いがかりをつけて会長虚子に草田男の処分を迫ったが虚子は、これを「ぬらりくらり」とかわし草田男を擁護した。

蕪子は、俳句弾圧事件に暗躍したとされ、愛弟子である草田男を攻撃することで、俳壇の大御所虚子の権威失墜をねらったとも言われている。

#### ③草田男のホトトギス、虚子からの巢立ち

草田男に対する監督不行届を理由に虚子が責められることをおそれた草田男は、昭和十六年虚子へ同人辞退届を出したが、この届けは虚子預かりとなり受理された形跡はなく、その後もホトトギスへの投句は続けていたが、長老達からの草田男いびりは止むことはなく、結局「ホトトギス」内で孤立感を深めた草田男は十八年末より「ホトトギス」への投句を断念した。

「ホトトギス、虚子から巢立ち」は、虚子への影響を怖れたことによるが、前にも述べたように、人間探求派としての句作りが、虚子の提唱する純粹な花鳥諷詠と違った方向になっっていることも巢立ちの一つの原因と考えられる。虚子は、これまで頑なに花鳥諷詠を唱えてきたが、草田男に対しては「生活や心の苦悩を俳句にすることも俳句の近代化であろう」と、草田男の句作りに賛意を示し敬意とエールを送っていることを考えると、草田男は、虚子の秘蔵っ子ではなかったかと推測する。

## 4、句碑

### (1) 句碑は二十四基

(平成二十三年一月現在「萬緑」発行所調べ)

草田男は生前は句碑は建てないと言っていたが、草田男の句碑第一号は、本人の知らないところで楽天グループの

手で松山北高校中島分校に設置された。以降平成二十三年一月現在二十四基の句碑が建てられている。このうち、生前設置されたものは四基に過ぎない。(椿神社玉垣の十二基を除く) 五基目に建てられた松山市東雲公園の句碑は、当初

は昭和五十八年八月六日に除幕する予定であったが、前日、草田男が逝去したので一年後の昭和五十九年八月二十六日に行われた。

句碑抜粋 (生前に建てられたものおよび松山市周辺に建てられたものを中心に)

一度訪ひ二度訪ふ波やきりぎりす	松山市中島町 松山北高中島分校	生前に建てられたもの
降る雪や明治は遠くなりけり	港区南青山 青南小学校	生前に建てられたもの
萬緑の中や吾子の菌生え初むる	調布市深大寺境内	
茶の花は雄蘂の奢日は沈む	伊予市三谷 えひめ森林公園	
夕櫻城の石崖裾濃なる	松山市東雲町 東雲公園	
貝寄風に乗りて帰郷の船迅し	愛媛県松前町	
田を植ゑるしづかな音へ出でにけり	愛媛県松前町 ひよこたん池公園	松山市周辺に建てられたもの
勇気こそ地の塩なれや梅真白	松山市持田町 松山東高の校庭	
春の月城の北には北斗星	松山市平和通	
空は太初の青さ妻より林檎受く	武蔵野市吉祥寺 成蹊学園	元勤務先

(2) ほづみ橋

宇和島市のJR駅近くに「ほづみ橋」という小さな橋がある。明治の憲法学者で、我が国最初の法学博士となった穂積陳重を顕彰するもので、弟子が、先生銅像を建てたい

のですがと言うと、穂積は、「銅像になって仰がるより萬人の渡る橋になりたし」と言ったという謂われのある橋である。

草田男が生前は句碑を建てないと言っていたことと通じ

るものがあるのではないかと思われる。

## 5、草田男の人柄と人間像

草田男の分骨をお墓に納めるために、家族が松山に帰ってきた後、長女三千子氏が草田男の友人二神伝三郎氏に出した手紙に「生前の父の一步はずれたようなテンポは松山のものだったことがあらためて認識され、若きころのみなさまとご厚情などに思いをせました」と言わせ、一方では、学校を卒業したばかりの三十代半ばで草城に論戦を挑み、戦時中は、当局ににらまれながらも自分の思うところを突き進む情熱、昭和三十六年俳人協会が設立されると初代会長に選任されるというリーダーシップ、草田男とはどういう人柄だったのだろう。本人や知人、作家の文章から訪ねてみることにする。

### (1) 友 伊丹万作

草田男本人は、伊丹万作についてどのように思っていたか、草田男は、万作のことを随筆などで「恩友」とか「愛庇」と表現している。

先日、天山の伊丹十三記念館に行った。万作の特別展が開かれており、その中で草田男が万作が亡くなった直後に、奥さん「池内君子」宛に出した手紙が展示されていた。

「豊さん（伊丹万作のこと）の今度の事、未だ私には、どうしてもほんとうとは思へません。」と言う書き出しで始ま

る便箋十二枚に綴られた手紙は、訂正も多く、話もあっち飛びこっち飛びで、四十代半ばの分別盛りの草田男が、万作を喪いどこにも持って行きようのない悲しみ、無力感に襲われている心の内がよく表れているとともに、草田男にとってどういう恩友であったとか、どんな愛庇であったか奥さんに万作との交友を切々と訴えており、万作と草田男の友愛関係がよく分かる内容であった。

### (2) 唯一回の酒のブランク

（本人随筆 昭和四十一年十一月「中央公論」抜粋）  
（前夜の泥酔を妻に厳しく問われて）

「今日からはつきりと永久に句作をやめろ」と言われ、「約束できなければ子供を連れて出て行く」と言って本当に出て行ってしまった。次女が途中で引っ返してきて、「一言やめると言え」と言ったが、草田男は、その場しのぎの嘘は言えなかった。結婚してただの一度も嘘を言ったことがなかったと言っている。また、夜になっても、出て行った妻や子にどのような仕送りをしようかと考え続けていたと言っている。

### (3) 大江健三郎のエッセイ

（本郷和子 「伊予と俳人たち」夕桜・草田男」一抜粋）  
「はじめて見た詩人」と言う文章が載っている。

草田男は万作の遺児達をいつも心にかけており、大江氏の友人であった伊丹十三監督（本名「岳彦」万作の長男）

が高校時代住んでいた松山市内のお寺で、初めて草田男を見たときの印象を大江は、「立派な風貌の紳士」「威厳と優しさが自然ににじみ出るふうな人物」と書いてある。また、「あの日の詩人の穏やかで真情あふれる様子は、なんと見事な成熟ぶりであったことだろう」大江健三郎氏は、そのエッセイの中で草田男のその時のことを書いています。

#### (4) 旅先での草田男さん 福田清人

(俳句十月臨時増刊草田男読本一抜粋)

福田清人は句作もするが、日大、実践女子大、立教大教授を歴任し、日本児童文芸家協会会長を務めた人で草田男とは「文芸広場」という職場雑誌の選者としての集まりで親しくなり、年に一回は講演を兼ねた地方の催しに出かけた。そのときのある意味で草田男らしいエピソードを三点①草田男さんが、ある旅先で「幻住庵の址に、もう一度行ってくるから、自分は最後に回してほしい。」という希望で講演を始めたが、予定の時間になっても帰ってこないの、草田男さんの前、木俣さんの講演を引き延ばし木俣さんは汗を拭き拭き、持ち時間の二倍位やっている所へ、ようやく草田男さんが姿を見せた。「いや、どうも、どうもータクシーが拾えると思っていたもので……」二十年前の幻住庵址近傍はタクシーなど通る場所ではなかった。と福田清人は言っている。「幻住庵は、芭蕉が奥の細道から帰った翌年、約四ヶ月住んだ庵跡」。

②山口から萩へマイクロバスで行った時であった。草田男さんは、「ここで私を降ろしてくれ。」と云って、ひとり降りてしまった。町まではかなりありそうな場所であった。「中村先生は、ひとりで宿の場所に來られるか、大丈夫でしょうか？」と不安がっていた人もあった。(超脱的でそういう不安をひくような面も草田男さんにはなくはなかった。)

③草田男さんの講演は、いつも真打ちになっていた。山形での講演で、最後の草田男さんの番になると私から、時計を借り、それを卓上において、語りだした。時々時計を見ながらも、はるかに時間を越え、司会者は、つい恐縮しながら何か記した紙片を、壇上の卓において。草田男さんは、「おや、私は時計を逆に見ていました。」と拍手のうちに壇を降りたのであった。

## 6、おわりに

西暦二〇〇一／九、俳人協会が出版した「俳人協会の歩み」という本がある。その中の「想い出の人」という蘭に草田男について追悼・想い出の言葉が綴られている。(抜粋)

#### ①高木晴子(高浜虚子五女)

草田男さんは、いつ頃からかお正月二日に高浜へ年賀に來られる様になった。父が亡くなってからも、きまつて二日には母を訪ねてくださった。忙しくて夜になられる事も

あつたようだった。(中略)

新年の母の茶の間は草田男さんのもの柔らかな松山のアクセントのお話で一刻楽しかった。「奥さんだけになられても、僕はお正月の二日にはきまってお訪ねするのだ。」とちよつと得意気に、又優しく話しかけていられた。母も嬉しそうにお相手をしていた。

## ②平畑静塔

一昨年秋、彼の傘寿祝いに乾杯の首頭をとり、「…俳壇いな日本のためにより長寿を希う」と告げたのに、遂に地に落ちたるかと、転変異変のように私を襲う訃報ではあつた。

心残りではあるが、私にとつての草田男は、昭和の初め、ホトトギス騒動の頃、わざわざ西下して、病床の中村三山を囲んで、我々京大俳句の仲間と一刻の面談を交わした、初対面の誠実、熱意のかたまりのような草田男は、そのまま今日までつづき、これからもつづく。

あれは、親虚子の良心派の青年が、反虚子の情熱青年に心中を吐露して見たかつたのであろうか。少なくとも私はこの時の彼の善意と誠意を信じたなればこそ、その後五十年間、草田男の言う事ならば、必ずやその芯に彼の誠意と熱意がこもっていると信じて行動をともして来た訳である。最早その人はこの現世には居ないが、私は見えざる草田男の存在を納得してゆけるのである。見守りたまえとね

がう。

## ③まとめ

長女三千子氏が二神伝三郎氏に出した、「一步外れたようなテンポ」高木晴子の「もの柔らかな松山のアクセントのお話：母も嬉しそうにお相手をしていた。」平畑静塔の「初対面の誠実、熱意のかたまりのような草田男、私はこの時の彼の善意と誠意を信じたなればこそ、その後五十年間、草田男の言う事ならば、必ずやその芯に彼の誠意と熱意がこもっていると信じて行動をともして来た」と言う言葉は、それぞれが真実を言い表しておりそのトータルが草田男であると思える。

## (参考資料)

- ・俳句十月臨時増刊中村草田男読本 (昭和五十五年十月)
- ・中村草田男 郷土俳人シリーズ ⑦ 愛媛新聞社
- ・平畑静塔俳論集「京大俳句」と「天狼」の時代 沖積舎
- ・現代俳句大辞典 (株)三省堂 (西暦二〇〇五/十一)
- ・中村草田男 香西照雄
- ・中村草田男 香西照雄
- ・伊予と俳人達 本郷和子
- ・俳人協会の歩み 俳人協会
- ・漂白と思郷と 山本健吉
- ・図説俳句 あらきみほ
- ・芝不器男 堀内統義
- ・萬緑(西暦二〇一二年八月号)・八六/六「俳句四季」

(平成二五年二月例会講演を再編 会員)

森 連甫の句  
『眞砂の志良邊』より

森 慎 吾



森 連甫  
明治35年10月  
65才

一、連甫の略歴と『眞砂の志良邊』

森 連甫（天保9年4月5日～明治42年8月18日）（一八三八～一九〇九）は、俳人・米穀商。和氣郡三穂町四五番戸（現松山市三津一丁目三一二）に住んだ。本名榮次郎、諱重連、別号嘯月齋。

連甫は、明治13年1月誹諧結社「明榮社」を興し全国でも三番目に古い月刊俳誌『眞砂の志良邊』を創刊した四時園大原其戎宗匠（注）の高弟、「明榮社」の幹事として、こ

の俳誌の発刊を支援、補佐し、其戎没後はその継嗣、其然を助け、自らも句の選に当った。

（注）文化9年5月18日～明治22年3月31日（一八一二～一八八九）、和氣郡三津濱町大字榮町（現松山市三津一丁目）に居住。其戎は、専心、芭蕉誹諧の心を求めて句作につとめた。

子規は明治25年6月27日付の碧梧桐・虚子宛書簡で、連甫の句を七句あげて之を称揚し、「一此句を見て小生又一奮発の勇気を起し申候大兄等以て如何となす」と書き送っており、これに対し、二人が、ともに良しとした連甫の句は「二ツ三ツ重なりあふて雪の嶋」であった。

平成21年発見された子規自筆選句稿「なじみ集」の冒頭、子規が終生師と仰いだ其戎の項に19句が、次いで連甫の項に25句が収録されている。

詳細は平成19年10月例会（『子規会誌』118・119号）および20年2月例会（『子規会誌』122号）で発表の「大原其戎宗匠と森連甫（一）（二）（三）」を参照。

## 二、連甫の句『眞砂の志良邊』より

1 現存する俳誌『眞砂の志良邊』は、(別表)の内ゴチツク体の第36号から143号までの67冊(欠番あり)であり、この内本県にあるのは第36号より第122号までの54冊。本県にない第98号及び第123号より第143号までの13冊は、法政大学「正岡子規文庫蔵書」に収蔵(第91号より第97号及び第99号から第122号までは、本県と法政大学双方にある)。

この、本県にない、法政大学「正岡子規文庫蔵書」分は、松山子規会副会長和田克司氏が、以前同大学に赴き、撮影された貴重な映像を、ご提供いただいた上、活字化下さるなど、懇切なご教示を頂きましたことを、厚く御礼申し上げます。

この、本県にある『眞砂の志良邊』は、昭和47年11月11日、愛媛県立図書館が、連甫の孫である森勲(筆者の伯父、松山市三津一丁目)所蔵のもの(欠本あり)を複写し、昭和48年3月12日同図書館がその複写本を編入した。その後昭和57年5月27日、松山市立子規記念博物館が同図書を、収蔵した。

2 連甫の句集編集について、以前和田副会長からお褒めを頂いたこともあり、平成22年1月26日から同年3月9日の間、県立図書館に通い、前述の『眞砂の志良邊』より連甫の句を筆写した。

現在使用されない難解な漢字や用語、また印刷の掠れ等で判読不明の字句が多々あるが、今後の研究課題としたい。

3 俳句を物しない身ながら、例えば次の句等は、表現に新鮮味を感じ、特に胸に残った。

若鮎の軽う超ゆるややまの陰 第100号 明治21年4月12日

この句は、谷川のことは何も言っていないのに、溪流と滝を遡上する若鮎の姿が目に見え。

立波を押へて通るくちらかな 第132号 明治23年12月12日

大海を過ぎる鯨の勇姿を「立波を押えて通る」と表したのが、斬新で印象的。

4 『なじみ集』所収句はゴシック体とし、句の下にその旨表記。子規が「碧虚宛書簡」で推賞した句も「碧虚宛書簡明治25年6月27日①」等とゴシック体表記。

明治十五年十二月十二日発行 第廿六號

伊豫國和氣郡三津榮町三十五番地(現・松山市三津一丁目4-18辺り) 明榮社

明榮社月並抜粹之写(以下同)より、第36号明治15年12月12日と表示

第36号 明治15年12月12日  
四時園其戎撰(以下同じ)

題 水鳥 年乃市 古曆

棟梁ハ猶見ふるしたこよみ哉

三津 連甫 (以下略)

席上探題

澄鷹も眼か、やくあさ日かな

まなこ輝く。

皆とみた拍子なりけり節季候

納豆や納所か居間は反故張

寒梅やからひたやうな明の月

月花の友揃ひけりとしわすれ

第38号 明治16年2月12日

題 山笑 海苔 恋猫

旭の艶を漉込む海苔の色香かな

席上題 春風 早蕨

磯の香も富むるやしろや春の風

○ 花の本の尊像ハ明榮社に有社中の繁榮は年毎山川万里の

道

芝の萌出ルがごとし猶其峯をしたふ友を待て麓に杖袋の

紐を解

誘引ハれつ誘ひつ花の案内状

第39号 明治16年3月12日

題 菜の花 彼岸 貝寄風

貝寄風や濱の眞砂の増るおと

貝寄風 (かいよせ)

陰曆の二月二〇日頃

菜の花の香に穢れけりたひ布

に吹く西風。

穢 (けが) れ。旅布

(たびごろも)

席上題 初雷 帰雁 春の月

松ははな柳ハいとやハるの月

第41号 明治16年5月12日

題 夏乃月 卯乃花 競馬

数千里もつらぬくふりや競馬

第44号 明治16年8月12日

題 今朝秋 駒牽 鳴

しきなくや双まつ二日月

席上題 盆月 蜻蛉

盆の月た、真丸うふけにけり

俳諧之連歌 (前号の続き)

麦菓子も時によつてハ珍しき

第45号 明治16年9月12日

題 十六宵 舛市 稲苅

十六夜のやみ江らすや橋の反

席上題 月

空に雲地にちりもなし月今宵

席上俳諧之連歌

待宵と居まち八月の趣向かへ

鳴、二松、江 (すべ) る。

天位

第46号 明治16年10月12日

題 琴平祭 鬼灯 冬隣

御物見のうちや酸漿鳴らす音

席上題 后月

八幡野や藪おと寒き後のつき

酸漿さんしょうはおづき。

地位 後の月おのえ陰曆八月十五日の夜に對して、

九月十三夜の月。

十三夜。

題 岡見 師走 餅搗

三次野の空かほはしき岡み哉

九重の曾良を敬ふおかみかな

臨時會題 氷柱 節季候 鯛味噌

ぬれてたつ鳥の尾に引く氷柱哉

俳諧の連歌

一羽つゝ時雨れてたつや湖の鴨

帯のからとりく流行仕入れ物

追善

茶の花や玉よりきよきこの雫

右は和氣郡山越長健寺ニ於テ執行

第69号 明治18年9月12日

題 月 木乃子 落鮎

くに境争ふふりや木の子かり

染もの、□くりかわく虎落竹

九重こゝろ天

連甫

うみの鴨。

柄とりどり流行る。

會主松山玉井静山

茸狩り

□（厂）にヒ（印字

不鮮明）虎落（も

がり）（枝のついで

た竹を立て並べ、物を掛けて干すの

さ、波も花にはた、ぬ天氣順

臨時會席上題

梟かぶ。秋の風。

席上句合 題 鹿

尾上から妻呼こゑや月のしか

句合 題 菊

しら菊のい路に約る句ひかな

第49号 明治16年12月12日

題 大年 冬椿 事始

水引のはく粧ふやはしめ

捧吟のつゝき

言の葉の猶もた、しき祭かな

席上題 あられ 師走

みの壁には生まれ有藪かな

第60号 明治17年12月12日

藪かぶ

第70号 明治18年10月12日

題 袖味噌 秋の色 十夜

丸窓ハ丸うに匂ふ袖味噌かな

席上題 行秋 稲雀

待秋や雀からすのこえまでも

郵便の手紙もまれなふゆかれて

臨時會席上題 秋冬

湖に音をさらせしきぬたかな

○ 花に敷庭ハへつにこしらえて

第71号 明治18年11月12日

題 雪 石露花 天長節

鳩の湖根にして雪の高根かな

日も月もまるき世並や天長節

○

けふと云う敬ふ會良や初時雨

臨時會題

琴の音も月も冴るや更類ほと

第74号 明治19年2月12日

題 霞 梅 涅槃會

掃きよせた塵も匂ふやうめの花

席上題 若艸 うくいす  
うくいすをちからに登る峠哉

若艸の上や小鳥にふますのみ

俳諧の連歌

張交の屏風と、のふ月のころ

さす月に鶺鴒川の簞うすらきて

席上句合

川舟のまやひを放すやなき哉

紅梅もきそふ色なり二軒茶屋

はるかせや社々のまつのいろ

第75号 明治19年3月12日

題 種井 社日 雉

竹も木も匂ひをふくむ社日哉

鶺鴒湖せせりうみ 琵琶湖の別名。

敷く庭ひら

若草の。

簞かき。

もやいゝ舟と舟とを

つなぎとめること。

社日しじつ 立春後および立

秋後の第五の戌いぬしの日、

春を春社、秋を秋社と

いい、この日、土地の

神を祭り豊作を祈る。

春秋の鎮守の祭り。

おほろや浦のかげ。

十返りの花々松の花の

別称。松は百年に一度、

即ち千年に十度花が咲

替るほど。

臨時會題 春季

瀬戸しほにこゑ漂ふや島の雉

いさり火も月も朧やうらの景

十かへりの花や殊更伊勢の松

即ち千年に十度花が咲

席上句合

月よりも日の夢長き田にし哉  
不二の雲羽にたき込や帰る雁  
孕鹿こゝも春日のしき地なり

勝 持  
持 孕鹿。

第76号 明治19年4月12日

題 花 鍋祭 別霜

箒目をして待宵やわかれしも

別れ霜、春に降りる最  
後の霜。わすれども。

俳諧の連歌

友の来て親しげに炬を塞ぐらん

ふさぐ。

狐火ハ雨にはならず空さはけ

狐火、人が灯していな  
いのに火が燃える現象。

席上題 櫻 田螺

はなさくや笥超し来る水の味

笥、竹をかけたわたくし  
水を通すもの。

第78号 明治19年6月12日

題 五月闇 帷子 苔の花

帷子にあつき色香ハなかり鳧

帷子、生糸、麻で作った  
ひとえもの。又一般にひ  
とえもの。

俳諧の連歌

連甫

梅干の雫にそむやありのみち  
投込た手紙も恋のかたむすひ  
両國をへたてわてりし月と花

臨時會題 夏季

夏深き木の間の冷や雲とみつ

雲と水。

夏さくや雨を受けても日の匂ひ

二か国の声をむすふや田植歌

席上 句合

眞丸う江るあらしやなつの月

第79号 明治19年7月12日

題 納涼 葛水 土用干

世渡りの咄なかけてすゝみ舟

話流して涼み舟。

第84号 明治19年12月12日

題 袞 年の別 師走

梅にはや馴染て年の別れかな

聞にさへ世話し師走の市の聲

席上題 すゝはらひ さゝなき

すゝ掃て心明るきすまひかな

席上俳諧之連歌

鶴のかけ渚のまつの匂ふらん

笑かゝる花の薫にほたされて

えみかかると。絆されて。

帷子のいろに若やく妹かとし

臨時會題 冬季

水鳥のかほそみけ、りひえ風

比叡風、比叡山から吹  
き下ろす風。

席上題 霰 冬 厄払  
あらはれた石檀白し冬のやま

席上俳諧の連歌

つくり松嵐も軽うふきわけて  
谷かはを何処までのはる□舟

□は、舟偏に旁は共。

久保田隣舟居士の幽回忌に追善式俳諧一順を供す  
咲花に風情の替るあた、かさ

第85号 明治20年1月12日

題 初空 鏡餅 寒梅

か、みもち嵐も福といはれ鳧

初會俳諧之連歌

綻ひたはなにつ、きし日和順

ほころびた。

席上題 書初 手鞠

松竹に声をのするや手鞠うた

連甫謹花評

追加

社則改正により花評いなむ事あたはすつたなき筆をとる  
事となりぬ

恥しき顔をのするやか、み餅

連甫五十歳。

第86号 明治20年2月12日

題 嘯 春の水 芹

駒とめて比良の脉めや春の水

花評之部

追加

周防国醉月代評

爽に巡るゆとりやはるのみす

連甫  
爽やかに。春の水。

俳諧之連歌

旅戻おもはず道のはかとりて

春ハ早市の都含みに花こゝろ

○

若くさの伸る匂ひや日和くも

三條の小鍛ハいつも注連張て

附勝俳諧

秋の巻

相撲取出世したやら弟子連て

第88号 明治20年4月12日

題 藤 試茶 炉塞

岩角をさき包けりふちのはな

席上題 汐干 つ、し

松かけの放れて遠し汐干かた

(第100号 明治21年4  
月12日 松かけを放れ  
て遠し汐干かた)

俳諧附勝之部

春の巻

置つゆも月もろともに眞丸し

薄墨櫻に集會して

薄墨の櫻にはつるやたてかな

薄墨のいにしへ語るさくら哉

第89号 明治20年5月12日

題 桐の花 浮巢 日傘

花とみゆ霞か関の日かさかな

花評の部

追加 周防酔月不在二付代評連甫

開き地に花を咲して桐はやし

朝空のひやみのするや桐の花

席上俳諧の連歌

面白き血氣盛りのあたくらへ

明治二十年四月一日一山居士追善脇發

俳諧之連歌

咲きかゝる花にしりそく路地の冷

第90号 明治20年6月12日

題 鵜飼 藻の花 夏祭

八十嶋の根を藻の花の包けり 八十嶋やせ多くの島。

會席題 ほとゝきす 田植

一雨にぬれて目出たし田植哉

更てゆくやまのすかたや時鳥 更けて。

俳諧之連歌

反橋のそりをあやとる秋の風  
咲かさむ花のくもりの美しさ

附勝俳諧之部 秋の巻

落札に成へき山のもとかしさ

第91号 明治20年7月12日この号より子規の句掲載あり。

題 蓮 高竈 冷汁

下馬札にてり添ふ蓮の威光哉 「なじみ集」くてりそふ。

席上兼題 夕兒 雲の峯

夕かほのかけを巻込寢座かな 「なじみ集」く夕顔の影を  
まさこむ寢座(ねご)哉。

花評の部

蚊の声を放て涼したかむしろ

高竈たかむしろく竹を編んで作つ  
たむしろ。

席上題 青田 火取虫

さはやかな風も生るゝ青田哉 「なじみ集」

第92号 明治20年8月12日

題 霧 秋の蝶 艸の花

艸の花只一いろてなかり梟 草の花。梟けり。

艸の花咲くや廣野のゆふけしき

席上兼題 虫 菽

虫の音を踏わけ行や野の小道 松山 正岡

追加

武蔵野や艸の波間に虫のこゑ 其戎

花評の部 周防瀧女代評 連甫

追加

花表たけ越すは遣ひや秋の蝶 「なじみ集」 たけこす羽

遣ひや。

席上題 鹿 稲

鹿笛やこすゑを傳ふつきの冷 天位 「なじみ集」 梢

をつたふ。月のひえ。

稲の香に持や日の艶月のつや

月と日の重みを見する稲穂哉

附勝俳諧の部 秋の巻

さまくなものうき夢ハ猿の食

第93号 明治20年9月12日

題 寶市 稲 初汐

初汐や浪花のあしもうらの景

席上兼題 名月 渡鳥

海見ても河見てもよき名の夜哉

名の夜く中秋（陰曆の八月十五日）の名

月の夜

花評の部 宇和島 梅子撰、三津 教良撰

八千万田や溝へ押出す稲の波 「なじみ集」

追加 周防國醉月代撰 連甫

はつ汐や粧ひ深き磯なれまつ 「なじみ集」 初汐や

よそほい。磯馴松。

第92号花評遠江探松分遅参に付こゝに記す

秋の蝶春来た道をたとりけり 「なじみ集」 く春きた。

第94号 明治20年10月12日

題 甘干 后の月 紅葉鮒

あまほしや一谷隔ても隣同士

追加 周防醉月代評 連甫

水の垢まで染りけりもみち鮒 「なじみ集」

俳諧之連歌

夏の雨気色はかりて降もせず

料理場に馴てハ邪魔に成ぬ犬

第95号 明治20年11月12日

題 茶の花 火鉢 神楽

うら風を抱込舟の火はちかな

花之本祭脇發俳諧之連歌 「なじみ集」 く浦風を。

波頭居ならふとりの羽を組て 居並ぶ鳥の。

第96号 明治20年12月12日

題 すすはき 年の暮 玉子酒

年古き棟木めてたしす、拂ひ

「なじみ集」 く煤払ひ

「碧梧桐虚子宛書簡

明治25年6月27日①

寒に入音静かなりたきのみつ 滝の水。

花評の部

す、掃や窓から匂ふ松のかせ

松の風。

俳諧附勝の部 冬のまき

名に聞けと螢合戦ハ未だ見す

第97号 明治21年1月12日

題 若水 賣初 寒聲

賣そめにとむるや舟も問丸も

問丸く問屋に同じ。

余興相撲句合

とし男何を言うても笑ひけり

勝 「なじみ集」く年

男何をいふても。

「碧虚宛書簡明治25年6

月27日②」

はつゆめの山美しう明にけり

花評の部

追加 卓朗代表 連甫

賣そめの富るこゑなり人出入

第98号 明治21年2月12日

題 梅 山笑 二日灸

幣を振やうにわらふや神路山

「なじみ集」くふるやうに

花評の部

追加 周防酔月代評 連甫

面白ふ咲や野梅の洒落具合

「なじみ集」く「なじみ

集」では、「眞砂の志良邊」

第113号明治22年5月12日

「水ヒふ枝や野梅の洒落

具合」。の「水ヒふ枝」を、

この「面白ふ咲」の右に

併記。）

月の出て見處深し野路のうめ

○ 春永をこたてに市の小家建て

三津港夷子社捧燈抜粋旧十二月分上座十六章

寒月や早瀬に居るみつのいろ

人位 (第99号で、

「みす」を「みつ」

と訂正)

月受けて戦く白髪やあちろもり

そよぐ白髪や網代守

(網代く冬、水中に竹

や木を組んで立て、

魚を捕るしかけ)

水仙の花にしらけし月夜かな

まつ風の音を着こなす衾かな

水仙の花にしらけし月夜かな

まづ風の音を着こなす衾かな

具。ふとん。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

具。

てふ舞ふや海の上這ふ日和雲 「なじみ集」 蝶舞ふや。

はふ日和くも。

席上俳諧之連歌

革足袋をはいて凌しつきの冷

しのぎし。

三津港夷子社奉燈廿一年舊正月分抜萃上座十章

乃す風のかけ漂ふや海のうへ

第100号 明治21年4月12日

題 若鮎 山吹 艸餅

若鮎の軽う超ゆるややまの陰

花評の部

追加 肥後梅露代評

連甫

艸もちやいほの懐紙も染る色

席上俳諧之連歌

松かけを放れて遠し汐ひかた 「なじみ集」 松影を

・ ・ ・ 汐干潟

三津港三穂社奉燈本月舊二月分抜萃上座十章

山焼や水田に移るつきのかさ 地位 「なじみ集」

うつつる月の笠

入舟や帆にたゝみ込夕かすみ

第101号 明治21年5月12日

題 入梅 酢 行ゝ子

鮮店のけしきとなるや吉の川

花評の部

追加 周防五風代評 連甫

早つけのすしの風味や瀧見臺

眞砂の志良邊一百號祝集句合背春季十題 東西として

撰吟二百章

東の方

明らかな匂ひやはなの御供田 持

桃酒やよろつの春をたもつ色 持

艸餅やいく代の春をたもつ色

これより余興の部

題 前のことし 抜萃五十章

艸餅によし野のたより聞こえ梟 『子規会誌』 118号

(平成20年7月)

十五頁、「大原其戎

宗匠と森連甫(一)参照。

眞砂の志良邊一百號祝集開卷席上俳諧之連歌

弊社の永続は遠近の人力にあり 其戎

岩たれの水も和らく花のてり

千代よろつ匂ひかさみし花曆 其戎

言の葉に花咲はるの詠めかな 詠めかな

眞砂の志良邊第一百号號の開會にまかり諸君の祝吟を謝す

みな雲に乗る粧ひや四方の花

第102号 明治21年6月12日

題 葉柳 茅の輪 団扇

葉柳にふき消れけりかにの泡

「なじみ集」吹きけさ  
れけり蟹の。

花評の部

追加 新居軍一松代評 連甫

入月を惜みて遣うちはかな

つかう団扇。

葉柳やかけ行灯のおくゆかし  
すこやかにちのわを潜笑顔哉

茅の輪を潜る

席上題 虎か雨 蟬

只ならぬ空のくもりや虎か雨

第103号 明治21年7月12日

題 清水 晝寝 灯取虫

青くさき山の冷みやこけ清水

「なじみ集」苔し水

「碧虚宛書簡明治25年6

月27日③」

木も鳥もかけまで清き清水哉

影まで。

花評の部

蚊帳の波渡て来たか火取むし

第104号 明治21年8月12日

題 月 不知火 はせを

文臺をてらすはせをの雫かな

席上題 朝かほ 初か利

朝顔に耻るいろなりあさの星

朝顔に恥じる。

席上俳諧之連歌

よむ度に粧ひのますたひ日記

花評の部

月の出て見處多し和田のはら

海の原(わたのはら)

うなばら

芭蕉葉の艶大空にうつりけり

七浦に景色とりまく山の月

第105号 明治21年9月12日

題 紅葉 夜寒 秋の蚊

聲澄や夜寒をさそふ磯馴まつ

花評の部

追加 卓朗代評 連甫

江に寄する音や夜寒のなみ頭

席上題 落水 木槿

万物のやしなひたりて落し水

養い足りて落とし水。

(苗代水の出口より下  
方の田へ豊かに溢ふれ  
る水)

熊本県肥後国細川梅露靈神招魂祭九月十三日弊社にお

いて執行

脇發俳諧の連歌

靈神

大広間秋たつ風のとくらん

文武両道に明かなる梅露君御遠行あらせられしを神保して

万燈のやうにてらすや露の玉  
第106号 明治21年10月12日

題 冬隣 風呂吹 団栗

ふる吹や障子に移る老の無事

席上俳諧の連歌

ほと遠く建し鳥居の涼しけに

席上題 小春 菊酒

金盃の模様もきくや菊のさけ

本社月見會席上題 月 芒

名月をいた、くいろや艸の露

しき鳥も空も明るき名の夜哉

月見會席上俳諧の連歌

稲薙磯邊間ちかくしきのひて

第107号 明治21年11月12日

題 炭 鷹 花の本祭

炭の香やしたしみ深き奥座敷

白炭や御次へもる、和歌の文

花之本本祭脇起俳諧之連歌

棟梁の指図つふやく普請手間

初花の咲も暖氣のしをりにて

び・細みと共に根本理念  
とする。

奉吟

速にしくれて高しみねのくも

第108号 明治21年12月12日

題 雪 年の市 餅苳

二つ三つ重り合ふてゆきの嶋

花評の部

団栗に日の脚はやき山路かな

何不足なくて淋しや冬となり

第109号 明治22年1月12日

題 門松 寒椿 大箸

門松にのすや空の深みとり

初會俳諧の連歌

遠近に香はしる花の果もなし

鏡もち丸き世なみをかさね鏡

席上題 鏡餅 初空

席上句合

もち花も咲して居るや祇園町

はついでや大黒丸と夷子まる

時雨れて

「なじみ集」「碧虚宛書簡  
明治25年6月27日④」

どんぐりに。

地位 「なじみ集」

し重ねけり

勝

初夢や。

しおり・しほりく芭蕉俳  
諧の用語。句におのずか  
ら現れた繊細な余情。さ

余興 碧水園大人評

朝月も氷る色なれ諏訪のうみ

二十にあまる年を迎へ千代もかはらぬ諸君の投吟を

祈る

四方拝してまつ墨のいろ香哉

幹事

四方拝くもと、元旦に

天皇が天地四方の神々

に国家の平安と五穀の

豊穰を祈った儀式

第110号 明治22年2月12日

題 若艸 春風 鶯 外に一月題かふ

鶯のこえにやわらく水のおと

俳諧之連歌

月夜さに二百十日の沙汰もなし

席上題 梅 春の月

一つ家の窓の果報や野路の梅

天位 「なじみ集」

席上句合 題 春季

宮守の呼はうこくやはらみ鹿

「なじみ集」く呼へは

動くや

第111号 明治22年3月12日

題 霞 蛤 堇

しほらしや舞子かはまの白堇

舞子が浜の。

席上題 彌生 蝶

飛蝶の羽に見え透や野の気色  
弾生野に富る音なり鶴のはし

席上句合 題 春季

竹馬をそはえ繫て二日灸

山やきや水田にうつる月の暈

毛せんの色はつかしき五形哉

第112号 明治22年4月12日

嘯月齋連甫撰

題 花 筑广祭 孕鹿

鳥啼やひやみをさそふ花の奥

弊社の継統を謝す

永かれと祈るちきりや鍋祭り

我師四時園翁のみまかり給ひしより晝夜恩をわすれず

花見てもわか力とハ思はれず 我力とは。

席上題 若鮎 行春

追加

うくひすの草臥かほや春の行 「なじみ集」く鶯の。

席上句合 題 夏季

あらたまる席も新茶の手前哉 秀一地

やさしきに戦く葉いろや若楓 勝 そよぐ葉色や。

其然

父其戎艸庵前庭にあるひともの花の蒼を楽しみしに

不図客月三十一日午後十二時彼の花の満開なるを詠めて一句を残しかへらぬ旅におもむきいとかなしさのあまりに居合の風子と涙をのこひ左の連歌をもよほす

客月かげづき先月。其戎の菩提寺「願成寺」

(松山市住吉二丁目) 過去帳には、四月一日とある。

居士

寝姿の司やはなをまくらもと

霜のわかれに窓寒き月 其然

川傳ひ舟にもものらす蝶のきて

飛脚ハいつも世話しさう也

氷もち器を見てもきよらかに

空に涼しう居るしら雲

下略

四時園其戎居士靈手向

うけたまへ我も手向ん春の水

第113号 明治22年5月12日

四時園其然撰(以下同じ)

題 時鳥 扇 若葉

かさしたる扇に白し滝見たい

余興題 夏季 嘯月齋 撰

滝見台。

追加

夏艸やあめを受ても日の匂ひ

席上題 螢 田植

とり逃すたひや螢の高あかり

とりにがす。 通りのがす。

亡師其戎翁の大練忌靈前を拝す

葉櫻やはな見た日より七七日

俳諧の連歌

水ヒふ枝や野うめの晒落工合

「なじみ集」(前掲、第98号 明治21年2月12日、面白ふ咲くや)

面白ふ咲くや)

第114号 明治22年6月12日

題 夏の月 田植 氷室

樓ハ夜のふけかたしなつのも月

席上題 す、み 昼顔

追加

晝かほやす磨も明石も同じ色

余興題 夏季 嘯月齋撰

追加

舟の夜の枕をた、く水鶏かな

昼顔や須磨も。

俳諧の連歌

玉苗やさすか泥にも染ぬいろ

故其戎

汗の流る、はてな笠の緒 連甫  
邂逅な非番を釣にさそはれて 戎

邂逅（かいこう・たまさか？）ゝ思  
いがけなく合う  
事。めぐりあい。

一里退けとも光る白壁 甫

大名のひけて淋しき月夜さし 戎

ところへ替る虫の音 甫

接待の施主に宮司の顔も見え 戎

三昧より大鼓手軽うに打 甫

咕囁もと、くかむろつ上の關 戎

咕囁（しょうしょう・ささやく）

無理な日和に急く生舟 甫

旗雲の結ほれながらさゆる月 戎

炭の香もる、庵の丸窓 甫

言儘に飛脚の賃をくれるなり 戎

あつらへて置角樽の口 甫

牛馬もかいこやしたる亭の長 戎

さひてけ高き仟佰の文字 甫

花の香ハ四十八瀬に分るらん 戎

少し霞のはけかゝる空 甫

黄鳥をあてに仕こみし其日店 甫

黄鳥ゝ鶯に似てやや大きい鳥。

小僧たかふる御朱印の寺 戎

鶯の別名。

自鳴鏡打音も風にもれきこえ 甫

湯治見舞に遣ふ松露糖 戎

とし毎にふとる櫓のかけを受け 連

櫓きこ梅せん檀だん

晝寝の夢をさます蠨螋 戎

蠨螋（じがばち？）

来掛た輪替にもたす戀こゝろ 甫

干あかりにくひ泥鍔むらの壁 戎

こてむらの壁

存外に勸化の世話の出来易し 甫

つひ落したる腰の印籠 戎

見るもの、皆美しき月のてり 甫

雀知らすハ伸かちに覺 戎

手廻しに注連縄までも掛る秋 甫

ねつけをかねる帟の鍵 戎

米商もはつみのぬるい順気さけ 甫

雪解の遅ひ富士川の水 戎

かさ脱て花の曇りを打なかめ 甫

盆に盛たる草餅のつや 戎

乙丑夏興行（慶応元年・一八六五）

俳諧の連歌 両吟（其戎五十四歳・連甫二十八歳）

二巻のうち、（一）「玉苗や」の巻、歌仙一巻。なお、（二）

「呼かとして」の巻は、『椿守り・森元四郎著作集』の  
四十四頁以下に掲載。この年の三月其戎が病没し、子

の其然が後を継いだとき、亡父の記念として、二十五年も前に巻かれたこの両吟を取り上げて、いる事を考えると、この両吟は、明榮社としてもかなり重く考えていたようである。

第115号 明治22年7月12日

題 踊 鼓子花 夕立

ひるがお  
鼓子花

席上題 水鶏 雲の峯

月の出てこゑの近寄る水鶏哉

「なじみ集」く聲のちかよる

雲の峯海のそこまてと、き覺

水のいろ迄白うなり雲のみね

余興題 夏季 嘯月齋評

追加

不二の根をかたむる岩や苔の花

「なじみ集」

第116号 明治22年8月12日

題 残暑 萩 蜻蛉

しら萩の冷み増るやおくの院

雲かけに乗て川こす蜻蛉かな

余興題 秋季 嘯月齋評

追加

雨の日はあめの風情や女郎花

席上題 秋風 盆の月

追加

海士の家も清き燈や盆のつき

居士大姉両尊靈手向 く故其戎令夫人六月二十日逝去。

迎火や二度汲みつの西あかり 水の。

第117号 明治20年9月12日

題 茸狩 星月夜

まつにのる浦かせ寒し雁の聲 浦風

須磨の夜の昔しのふや星月夜

夕榮のそら賑はしやかりの声 夕映えの

余興題 秋季 嘯月齋連甫撰

追加

秋の山いろさまくに替りけり 「なじみ集」

席上題

虫の聲しはしと、むる砧かな

唐からし是も七味の一つかな

月見會席上題 月 芒

薄野やとちらを見ても道一里

明榮社幹事拜

明榮社の月見會八年々怠らざること月次集眞砂の志良邊

にひとしことしまた・(略)・月々御投吟

あらんことをいのる

さす月に眞砂の肌を磨きけり

題118号 明治22年10月12日

題 菊 柚味噌 長夜

夜長さや窓をはなれぬ月明り

白菊のほとりに闇ハなかり覺

余興 題 秋季 嘯月齋連甫撰

追加

秋も良く立けり海と空のいろ

第119号 明治22年11月12日

題 枯野 水鳥 頭巾

圓居する友や頭巾のいる違ひ

水鳥や一羽一はにもつみつ輪

見わたしの枯野に高し朝の月

花之本祭脇起俳諧の連歌

初雪や水仙の葉のたはむほと

霍髦に花の匂ひのうつるらん

各奉吟前文略す

しきしまの教へ明るき時雨哉

席上句合 題 冬季

川風にこゑをさらしてやく拂

月次余興題 冬季 嘯月齋連甫撰

追加

花の本祖神祭典により遙拝所へ奉灯をものし参拝して

言の葉の月雪花をそなへけり

三津「惠美須神社」

境内の花之本大神碑に

奉灯参拝。花之本大神

は芭蕉のこと。花之本

大神碑は、福岡「櫛田

神社」境内、他にもあり。

第120号 明治22年12月12日

題 水柱 岡見 年籠

松かせを結び込たる水中かな

ぬかすけは明るき幣やとし籠

年こもり伊勢ちの方を恵方哉

松風を。

席上題 冬の月 事始 火鉢

やまハ皆眠るすかたや冬の月

藏建る地とりも出来てこと始

鳳凰のほりものしたり桐火桶

明治のとしの二十の有二の大陽の十二乃月の十二日の

會題冬季乱喰明榮社余興巻花□五十一章秀精喰左に記

雲水 はなの家梅府撰 □は抜の俗字。抜。

家の香や陸しさうに更るこゑ

地位

おもひ羽のならへて鴛の番哉

番。

第121号 明治23年1月12日

題 福寿草 初鷄 寒月

初鷄の聲に言葉のかはりけり

開く度床へうつるやふく壽草

俳諧の連歌

いほの無事重ねて見せん鏡餅

其然

其然

咲花に襦宜も衣服を改ためて

初會席上題 屠蘇 若水

屠蘇のえひ鶴に預けて遊けり

恭賀新年

先四方の無事何ふやはつみ空

第122号 明治23年2月12日

蝶鳥もきれいに濡れし春の雨

駕の戸に雫を飜す柳かな

幹事 連甫

駕かご、車馬

飜くひるがえ(す)

第123号 明治23年3月12日

題 曲水 貝寄 雲雀

瀬戸汐に聲を流すや揚ひはり

貝寄やまつの緑りをゆり起す

席上題 ふらここ 菜の花

菜の花に砂川までも染りけり

余興題

追加

松かけを放れて遠し汐干かた

第七位

嘯月齋撰

月並み會はいつも賑々敷あり侍れと本日はこと更開巻後酒  
宴半に至り各筆をとり懷紙を染ること稲妻の如しその句の  
うち甲乙はわかすともいささかここにうつす

松風の匂ひのはすや風のほり

田代や今に忘れぬくになまり

旭さす山賑はしやきしのこゑ

蝶舞ふや種火かふらす野の小家

江に移るかけ賑はしや山焼火

第124号 明治23年4月12日

題 牡丹 若鮎 竹秋

若鮎のつやにきゆるや砂の箔

若鮎のうへに重たし雲のかけ

見る人も別や牡丹のいろ違ひ

余興題 春季 嘯月齋連甫撰

追加

梅津寺へ出會をものし侍る

瀬戸落す舟も霞むや小ふし山 「なじみ集」くかすむや

○

我師四時園其戎翁の植置き給ひし明築社庭前の櫻の清け

きを敬ひ嗚呼光陰矢の如しと言はんやはや一とせを経

て一周忌の靈前を拝す

言の葉の今に明るきさくら哉

連甫 ほか

俳諧之連歌

○

呼かとして耳立て居る鹿の子哉

「なじみ集」〜耳立てゐる。

連甫

樗かけは川越しに置

其然

二三人碁をうつ友の朝ゆふに

甫

遣ふ茶碗の相馬焼なり

然

不手際な料理もはける月の秋

甫

鳥渡つきてものかぬ新浜

然

出来揃ふ浦の燈籠の波にゆれ

甫

洗ふた儘て結ぬくろ髪

然

なま知りな長崎猜拳を大語に

甫

晴つ曇りつ霰さまさま

然

山のゐの蓋もして有おち葉時

甫

襖にひく麵棒のおと

然

玉川の晝にも居りしつきの景

甫

秋の暑さに日反る揚弓

然

七五三縄を潜て乙鳥帰るなり

甫

しめ縄を。  
乙鳥〜燕の別名。

紺の袴は穢れめのなし

然

あけかゝるはなの匂の爽に

甫

わらひ強はかる石屑の中

然

番札にねむりをそへる二日灸

全

元服しても稚な名を呼

甫

酒造家は生魚□をうるさかり

然

御城下よりも流行劔術

甫

遥拝の鳥居なからも聲花に

然

のり合舟にはなし重る

甫

丸山ハ唐人くさきこいころも

然

國分菫は好ききらひある

甫

牛市に□雑魚をうりきらし

然

□は魚の名。魚偏に旁は「稷」の旁。

未刻かさかれはしまる關門

甫

杉の木は月を慕はぬ枝つくり

然

嵐につれて鳴の啼たつ

甫

大洋のなみともなりつ落し水

然

五市あふらを安う商う

甫

鑄屋のいらぬ時には毎度来る

然

世話しき中に笑ふ子の愛

甫

眺たやうな天気のはなれぬ日

然

海苔の匂も空に廣かる

甫

第125号 明治23年5月12日

題 虎か雨 螢 更衣

席上題 杜若 短夜

杜若(かきつばた)

としふるき伽藍照らすや杜若

第九位 伽藍寺院の建物。

みしか夜を怠りもなし鶏の聲

第十五位

みしか夜や芦間を迂る朝の月

第二十位

席上句合題 夏季

月更て蚊帳にさしこむ木陰哉

持

余興題 夏季 嘯月齋撰

追加

川音ははや木かくれて夏隣り

第126号 明治23年6月12日

題 辻か花 萍 大祓

太平を着かさるいろや辻か花

辻か花宮と寺とへわかれけり

喜月居士追善俳諧之連歌

うるほしき花の明りの一冷み

萍 (うきくさ)

喜月居士靈前手向前文略す

葉さくらや今に親しき水の音

喜月居士追善句集抜粹三十六吟松山雲祥寺奉額

海滴庵鶯居大人撰

静かさやつゆと月との友明り

第十二位

右同断抜粹太山寺観音奉額四時園其然

曠着して居ても古風な茶摘哉

天地人の二位に該当、

第127号 明治23年7月12日

題 納涼 綿か花 川狩

新田の富る明りやわたのはな

席上題 夏季

海原に浮くやす、しき鳥の景

第三位

余興題 夏季 嘯月齋連甫撰

追加

蝉啼や湖にゆれ込まつのかけ 「なじみ集」海にゆれこ

む松の。

「碧虚子宛書簡明治25年

6月27日⑦」

第128号 明治23年8月12日

題 桐一葉 放生会 稻妻

放生会

鳳風のいめ重りてきりひと葉

席上題 秋季 太山寺観音奉額

箭目の波にも添ふや秋のかせ

第三位 人

山門の箭目た、しうすもみち

第二十四位

余興題 秋季 嘯月齋連甫撰

追加

龍門へのほれとこひの放生会

放生会ほっしょうえ陰曆八月十五

日に行う放生(功德を積むために生き物を逃

がしてやること)の式。

第129号 明治23年9月12日

題 月見 渡鳥 新酒

わたり鳥馴染ありけや袖の浦

席上題 稲の花 鹿

脊にのする袖のかけや月の鹿

第十位

「なじみ集」背  
にのする。碧虚

宛書簡明治25年

6月27日⑤

余興題 秋季 嘯月齋連甫撰

追加

羽衣のやうに見えけり天津雁

「なじみ集」

第130号 明治23年10月12日

題 秋の色 御取越 網代打

日に雨に増る詠めや秋のいろ

席上題 秋季

ながめや。

出世する度に名高き角力かな

第七位

席上題 秋季連座

啼虫のこゑも正や内裏あと

第十一位

夏夜席上題 月すゝき

須磨明石放れて見ても名の夜哉

天位

玉章の種もつきせぬすゝき哉

地位

名月や思はぬとこに人のこゑ

第四十二位

第131号 明治23年11月12日

題 小春 紙衣 楯

気易けや楯火にてらす友白髪

鶯の輪の空に廣かる小春かな

小春日やこと更清きかみち山

花之本祭俳諧之連歌

暇はしも花の明りにかけ替て

余興題 冬季 嘯月齋連甫撰

追加

まつに乗る聲のこりや浦千鳥

花の本祭像前において句合題冬季

花に似たにほいくはるや櫻炭

第132号 明治23年12月12日

題 年木 師走 冬椿

足早にゆくや師走の人とふり

納会席上題 葉竹 鯨

空ハはや松の匂ひや葉竹うり

立波を押へて通るくちらかな

余興題 冬季 嘯月齋連甫撰

追加

人位

追加

楯はた焚物にする木の切れ  
はし。

神路山イ勢神宮内宮  
の南方の山

(別表)

『真砂の志良邊』現存号一覧表

- ・ゴチック体～松山市立子規記念博物館蔵書、(写)愛媛県立図書館蔵
- ・斜体ゴチック～法政大学「正岡子規文庫蔵書」(91号以降蔵)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
明治13年 1880	1号	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12号
明治14年 1881	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
明治15年 1882	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36号
明治16年 1883	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
明治17年 1884	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
明治18年 1885	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72
明治19年 1886	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
明治20年 1887	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96
明治21年 1888	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108
明治22年 1889	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120
明治23年 1890	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132
明治24年 1891	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143号	144
明治25年 1892												
明治26年 1893												
明治27年(1894)												

161号(終刊号) 明治27年9月

※ S47.11.11 愛媛県立図書館が、森 勳(松山市三津1丁目)所蔵の『真砂の志良邊』(欠本あり)を複写し、S48.3.12 同図書館に編入(36号から122号まで)。

※ S57.5.27 松山市立子規記念博物館が、上記図書を収蔵。

煤掃てまつの匂ひを迎へけり

納會席上において付勝俳諧之連歌

其然

さしのほる月に嵐のそよそよと

第133号 明治24年1月12日

先不二を恵方柱やはつみ空

「なじみ集」つまづ不二を

第134号 明治24年2月12日

題 霞 戀猫 椿

落るとハ見えぬ椿の盛りかな

席上題 雲雀 接木

七重八重富む九重の接木かな

余興題 春季 嘯月齋連甫撰

追加

句はしきこの豊さや花のはる

第143号 明治24年11月12日

題 麦詩 鯉 霜

初霜を踏消すこゑや朝すゝめ

余興 嘯月齋連甫撰

追加

あらはれた花表の白き枯野哉

本日十二日 花之本大神大祭に付各遙拜所へ参拜の上久保

高平氏の新座敷に於て祭式を執行す 久保田高平氏、久保

田回漕店店主

花之本祭俳諧之連歌

面白し雪にやならん冬のあめ

高吟

笑みかゝる花に和らぐ空模様

各奉吟

ことの葉も花と敬ふ祭りかな

月次會席上題 石露花 水鳥 神楽

大内はわけて明るき神楽かな 人位

月星もくまなき御世の神楽かな

角力句合

錦着る身もうき旅のふとん哉 勝

第157号 発行年月不詳 (一枚刷り、以下同じ)

四時園其然宗匠撰 (以下同じ)

題 短夜 苔の花 枝蛙

嘯月齋連甫宗匠撰

追加

ふ盡の音を堅る岩や苔のはな

不二の根を

第159号 発行年月不詳

四時園其然宗匠撰

題 浮巢 夕顔 炎天

嘯月齋連甫宗匠撰

追加

炎天やまつの梢にほしひとつ

余興題 雨乞 夏の月 沖鱈

追加

おく庭のふきあけみつや沖繪

第160号抜粋 発行年月不詳、終刊とされる明治27年9月第161号の前号

四時園其然宗匠撰

題 虫 稲妻 蕃椒

蕃椒ばんとう唐辛子

嘯月齋連甫宗匠撰

追加

艸の戸はむしの秋なり人出入

以上

(平成二五年三月例会講演 常任理事)

〔参考資料〕

〔俳句の里 松山〕

松山市教育委員会 昭和56年3月1日発行(初版)

〔椿守り―森 元四郎著作集―〕

自費出版 平成15年12月19日発行

〔愛媛県百科大事典〕(上・下)

愛媛新聞社発行 昭和60年6月1日発行

### 短信「松山子規会叢書・子規会誌の頒布について」

これまで、松山子規会叢書として刊行してきた書籍が数多く事務局において保管されている。発行から年数の経つたものなどは、最近は殆ど購入の希望もない状況である。「子規会誌」も、各年四回刊行されているが、二〇〇部以上も残ったままのものもある。

そこで、先の常任理事会で協議の結果、残っているこれら書籍・会誌を、会員諸子の研究活用に供するため、割安の価格で希望者に頒布することとした。なお、送料については自己負担でお願いする。お問い合わせは事務局まで。

事務局 七九〇―〇九二五

松山市鷹子町九三―四 宇和 宣

電話 089(976)6823

現在、事務局に多く残っている書籍の部数は次のとおり。

越智二良著 「子規こそわがいのち」 一〇〇部

同 「『草秋』など」 一〇〇部

同 「しのお草」 五〇部

松山子規会編 「子規敬慕」 三〇部

風戸始・越智二良著 「写真集 子規と松山」 三〇部

「子規会誌」 一〇〇号 一〇部前後

一〇一―一二〇号 三〇部前後

一二一―一三七号 五〇部前後

# 平成二十四年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

## 松山市立子規記念博物館

### ○正岡子規

#### ●単行本

伝記 正岡子規 松山市教育委員会 平成二十四、三、三十一

なじみ集 複製版 正岡子規 平成二十四、三、三十一

なじみ集 翻刻版 松山市立子規記念博物館 平成二十四、三、三十一

なじみ集 複製版 解説 松山市立子規記念博物館 平成二十四、三、三十一

正岡子規 ドナルド・キーン 新潮社 平成二十四、八、三十

子規断章 漱石と虚子 日下徳一 朝日新聞出版 平成二十四、十、三十

●論文

#### ●論文

鬼ヶ城俳話147 子規『なじみ集』における虚子句の読み方 復本一郎 「鬼会報」 177

鬼ヶ城俳話148 安倍能成著『我が生ひ立ち』の中の子規 復本一郎 「鬼会報」 178

「散策集」の課題 明治二十八年九月二十一日松山城北吟行 和田克司 「近世文学研究」 第4号

書評 李蕊著『正岡子規の写生文学とその周辺』(双文社出版) 浅沼璞 「近世文学研究」 第4号

第36回現代俳句講座その1「虚子から子規へ」 宮坂静生 「現代俳句」 平成二十四、十

第36回現代俳句講座その2「子規の時代」 秋尾敏 「現代俳句」 平成二十四、十一

子規の三峰十句集 井手康夫 「子規会誌」 132

歌人・山上次郎の「子規と茂吉」 鳥谷照雄 「子規会誌」 132

海外に息づく俳句と子規 乃万美奈子 「子規会誌」 133

子規選句稿「なじみ集」について 上田一樹 「子規会誌」 135

正岡子規と石井露月―「海楼つれづれ」より― 加藤三辰 「子規研究」 66

子規短歌の修辭―万葉集の枕詞と比較して― 片山武  
「子規研究」66

子規晩年の口述筆記における筆記者(他者)の介入につ  
いて 乙幡英剛 「子規研究」66

数詞「二」を詠み込んだ句(二) 伊吹純 「子規研究」66  
子規研究ノート『かくれみの』120年目の真実(その二)  
関宏夫 「子規研究」66

正岡子規と万葉集(十二) 片山武 「子規研究」66  
〈講演〉子規と「なじみ集」 和田克司 「子規研究」67

正岡子規の漢詩―短歌に触れて― 川井盛次 「子規研  
究」67

数詞「二」を詠み込んだ句(二) 伊吹純 「子規研究」67  
複製版『なじみ集』 日景洋一 「子規研究」67

正岡子規と万葉集(十三) 片山武 「子規研究」67  
子規によせて いまだ書かれざるもの 渡部光一郎

「子規新報」154  
子規と米山② 福田安典 「子規新報」154

子規の風・子規からの風16 子規の絵《晚香寒翠》《清節  
凌秋》―漢詩文の時代― 大廣典子 「子規新報」154

子規によせて 子規から考える(続)―1900年の横  
顔たち― 渡部光一郎 「子規新報」155

子規の風・子規からの風17 子規の絵―芭蕉の影―学習  
帳から― 大廣典子 「子規新報」155

子規によせて いまだ書かれざるもの 渡部光一郎  
「子規新報」156

子規の風・子規からの風18 子規の絵《秋海棠》―繪具  
で写生 大廣典子 「子規新報」156

子規によせて 子規歌論再読 渡部光一郎 「子規新報」157  
子規の風・子規からの風19 子規の絵⑥《あづま菊》大  
廣典子 「子規新報」157

子規によせて 熱いか冷たいか 渡部光一郎 「子規新  
報」158

子規の風・子規からの風19 子規の絵⑦ガラスと絵画《病  
室の冬》大廣典子 「子規新報」158

子規の四季 16〜27 池内けい吾 「春耕」平成  
二十四、一〜十二

子規の俳論俳話 46〜57 中川みえ 「春星」平成  
二十四、一〜十二

エッセー「正岡子規の顔写真」から 根本正 「青南」  
平成二十四、二

若手歌人による近代短歌研究・正岡子規 花山周子 「短  
歌」平成二十四、一

和風の選んだ子規の「恋愛俳句」考―安藤和風編『恋愛  
俳句集』を読む― 復本一郎 「日本現代詩歌研究」第10号

正岡子規と呉港 南政之 「俳句にぎたつ」平成  
二十四、三

正岡子規・赤木格堂と短歌 斎藤諒一 「俳星」 平成二十四、一

子規自筆の選句講評 和田克司 「俳星」 平成二十四、二

ペンリレー 続・子規の俳句革新に思うこと 伊藤一路 「俳星」 平成二十四、三

ペンリレー 八重の書簡と子規(中)(下) 武藤素魚 「俳星」 平成二十四、六、七

子規・虚子周辺 44〜47 平岡まさる 「花みかん」 45

小説・琵琶歌等に現れた子規の人間像 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十四、一

正岡子規と外交官僚加藤拓川(恒忠) 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十四、二、三

正岡子規と鳴雪 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十四、七

正岡子規の死生観 正岡明 「杜鵑花」 平成二十四、十

正岡子規の足跡 正岡明 「杜鵑花」 平成二十四、十一、十二

「水魚」のことから 132〜143 岡本八千代 「三河アララギ」 平成二十四、一〜十二

子規の短歌革新とアララギの歌人 1〜5 佐藤喜仙 「三河アララギ」 平成二十四、八〜十二

〈書評〉井上泰至著『子規の内なる江戸』 染谷智幸 「若

葉」 平成二十四、四

コトバの内なる子規―俳句以前について 橋本直 「イーサントゥーイー」 1

○夏目漱石

●単行本

漱石の落穂拾い―知られざる江の島 鎌倉 湯河原 句 漱石異説 山影冬彦 彩流社 平成二十四、四、三十

●論文

特集・漱石『文学論』をひらく 「文学」 13・3

漱石の月棒八十円の「真実」―外国人英語教師並みの待遇か― 三好恭治 「子規会誌」 134

○高浜虚子

●単行本

高濱虚子精選句集 遠山 彩流社 平成二十四、四、三十

●論文

芥川と虚子の交流 伊藤一郎 「俳壇」 平成二十四、二 第十二回国際俳句シンポジウム(7) 虚子の存間について(その二) 「花鳥諷詠」 平成二十四、十二

○河東碧梧桐

●単行本

碧梧桐百句 栗田靖 翰林書房 平成二十四、二、二十二

○その他

●単行本

芝不器男への旅 谷さやん 創風社出版 平成

二十四、四、十九

●論文

愛媛にゆかりの俳人 13～24 武市公子 「愛媛若葉」

平成二十四、一～十二

鳴雪より霽月宛句評の書簡―内藤鳴雪研究 中野匡子

「花鳥諷詠」 平成二十四、一

国語教科書の中の俳句―内藤鳴雪研究1―最終回 小林

國雄 「花鳥諷詠」 平成二十四、二～十

鳴雪探訪(松山)―内藤鳴雪研究 中野匡子 「花鳥諷

詠」 平成二十四、十一

鳴雪交友抄―内藤鳴雪研究 椋則子 「花鳥諷詠」 平成

二十四、十二

五友の一人 三並良 西村拓 「子規会誌」 133

内藤鳴雪の時代 平岡英 「子規会誌」 133

家族の絆と極堂―三度の挫折を超えて 二神將 「子規  
会誌」 135

【父極堂】 91―最終回 柳原正春作、伊藤深編 「しらさ

ぎ」平成二十四、一～四

現代俳人列伝 143～155 「鷹」 平成二十四、一～十二

露月折々 16～27 石田冲秋 「俳星」 平成二十四、一

～十二

石井露月の房総滞在記 加藤三辰 「俳星」 平成

二十四、六

内藤鳴雪小伝 畠中淳 「杜鵑花」 平成二十四、六、八～

十二

## 短信 「其戎句碑の除幕式」

新たに松山市三津二丁目の恵比須神社に建立された大原其戎句碑の除幕式が、五月二十六日に行われた。

正岡子規の唯一の俳諧の師である大原其戎宗匠の玄孫（五代目）故大原啓司（けいじ）氏（信州大学名誉教授、工学博士）は、其戎の句碑建立を願っておられたところ、信州大学退官五年後の平成二十二年五月、急逝された。

このため、綾子夫人は故人の願いを叶えるべく一昨年より数度、長野県上田市より当地に來られ、句碑建立にご尽力。この度、其戎縁の三津「恵美須神社」に建立が成り、平成二十五年五月二十六日（日）午後四時より句碑除幕式挙行の運びとなった。

碑の句

日永さやいつまでこゝにいよの富士 其戎

は、昨年五月、綾子夫人が建碑準備のため、再度來訪された折、ご挨拶に伺った松山市立子規記念博物館竹田美喜館長からアドバイスを、同博物館において昨年三月複製版・翻刻版刊行成ったばかりの子規自筆選句稿『なじみ集』の其戎の項



其戎の句碑

より選定された。子規の自筆の拡大による子規の師其戎の句碑、という一つの物語が出来るとのご教示であった。

この句は、明治二十一年五月十三日正午、『眞砂の志良邊』第百号刊行祝賀句会が三津の東郊、名勝久万ノ台の「成願寺」で開催された折、宴たけなわに至り遠く山口・大分まで見晴るかす興居島（ごしま）の夕映えの情景を詠んだもの。句碑の右脇、説明文の撰文にあたっては、和田克司副会長からの助言があった。

当日は、天候にも恵まれ、恵美須神社拜殿で柳原宰官司による神事齋行のあと、句碑御祓い、綾子夫人、長男章太郎氏（其戎来孫・六代目）、次男光平（こうへい）氏、三男有裕（ありひろ）氏ほか大原一家による除幕が行われた。次いで綾子夫人の施主挨拶、子規記念博物館竹田美喜館長、松山子規会和田克司副会長の来賓挨拶があった。

神社総代ほか多数の参加を得て、子規の原点とも言える其戎の句碑除幕式が、其戎縁の地で誠に意義深くかつ盛会裏に執り行われた。（愛媛新聞五月三十日ほかで報道）。

（資料提供 常任理事 森慎吾）（編集部）

### 子規会誌 第一三八号

季刊（四、七、一〇、一月）

発行日 平成二五年七月一九日

発行 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 〇一六二〇一七一一八六八

振替口座 (有)一葉印刷所

電話 〇八九九五一〇三三八

松山を代表する

# 銘菓「子規」・醤油餅

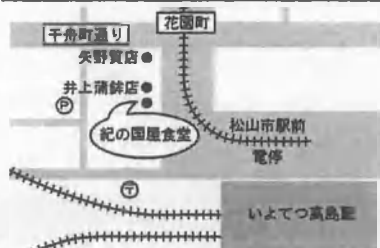
松山市道後湯之町13-7

## 巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

お食事処・麺処・宴会 (20名様)

# 紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、  
ふぐ会席、猪鍋  
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5

電話 945-1309  
(日曜定休日)

旬味あふれる会席をたのしみ  
あふれる湯にお遊びください。

 道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707

予約専用 ☎089-941-7782(8:45-20:00) ☎0120-10-4848(8:45-20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

心を  
ゆるめて  
ゆつたりと



# 子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット  
定価 58,800円

【編集委員】

粟津則雄 / 大岡信 / 長谷川耀 / 和田克司



四六判 上製・カバー装(各巻368頁~768頁) 定価 3,675円~3,990円 装幀 菊地信義

## 本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集。
- 新字・新かな表記、漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられるように工夫した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

## 【全15巻内容】

- 第1巻 子規の三大隨筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と静岡

【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17  
TEL 055-973-7117

 Z-KAI  
<http://www.zkai.co.jp/>

# (有) 二葉印刷所

社長 渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL (089) 925-0338  
FAX (089) 925-2189